

## 9. 外傷

ウサギはあらゆる外傷を負う可能性があります。問題はその程度です。軽い擦過傷（擦り傷）程度なら、治療すれば問題ないでしょうが、問題は、ウサギが良く遭遇する、落下です。骨折や関節の脱臼が起こることがあります。ゆえにウサギは、高い所に置いてはなりません。

骨折や脱臼は、四肢（前肢と後肢）が最も多く、時には腰部や胸部、頭蓋骨にも起こります。これらの骨折は、落下以外にも主に外傷、喧嘩、閉まっているドアに押しつぶされた、不適切な取り扱いなどの結果としても起こります。うさぎは骨格が軽く、デリケートな動物です。残念なことに、ウサギの背骨は柔軟性に欠け、他の動物よりも簡単に骨折してしまふことがあります

外傷歴がない場合にも起こることがあり、そんな場合は、骨が弱くなっている基礎疾患や先天性のものを考慮しなければなりません。骨が弱くなっている場合、病的な骨折にはわずか力でも起こり得るのです。例えば大腿骨頭の自然骨折や、子宮の腺癌から転移した骨による病的骨折です。

外傷の場合、出血、横隔膜ヘルニアによる呼吸困難、腹部の重篤な損傷、ショックなどの生命を脅かす合併症を最初に治療しなければなりません。全身の X 線写真と病的な骨の部分の X 線写真を最低 5～6 枚以上撮影することが推奨されます。骨折治療の基本原則はケージ内で休ませる、包帯による保存的治療、あるいは手術して、ピンやプレートで内部または外部を固定します。

ウサギの骨折や脱臼に対する手術のアプローチは、イヌやネコとは異なります。修復の緊急性については、さまざまな分類法が提案されています。比較的まれですが、開放骨折、難治性の感染、壊死、腫瘍、または自傷行為により、四肢の切断が必要になることがあります。

四肢の前肢（橈骨や尺骨）、後肢（脛骨や腓骨）、骨端症の骨折は、ウサギが若い場合は骨片の転位が軽微であれば、十分な骨折治癒が期待できます。上腕骨や大腿骨の骨折では、ちょっと事情が変わってきます。

ウサギにおける金属製のプレートやスクリュー（ねじ）の使用は、脛骨骨折に限られています。しかし骨が柔らかい場合には適応できません。スクリューの穴から骨に穴を開けた後に、骨の裂け目が生じることがあるからです。

自然発生的な大腿骨の先端の骨幹部の骨折には、大腿骨頭の頸部切除術（FHNE）が必要となる。術後は、屈曲・伸展を含む理学療法を行いリハビリテーションに努める。ウサギの関節の脱臼の

外傷例は、肘関節と股関節が多い。

報告によると 30 羽のウサギを 11 年間にわたって調査したケースでは、脱臼の 70%が肘関節(特に肘後部)、30%が股関節でした。この原因は、ウサギの特有の動きである、前後の屈曲・伸展(矢状面上の動き)の動きを可能にする、スナップジョイント(snap joint)を持っていることに起因していると思われます。それに対して横の運動の安定性が高いのは、上腕骨顆の働きによるものです。

ウサギの外傷と言えば、最も注意しなければならないのが、脊椎(椎骨とよばれる骨が連結したもので、頭側から頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、尾骨がある)の骨の骨折(Vertebral fracture)や脱臼です。特に腰椎に多発します。これは家庭内でも、家庭外でも、動物病院(診察台から落ちる、伸び過ぎた歯や爪を切ってもらった時等)でも至る所で起こる可能性があります。

幸いなことに、最近ではウサギを慎重かつ適切に取り扱うようにトレーニングを行った動物病院が増えて、このようなケースは比較的少なくなっていますが、今でも稀に起こっています。脊椎骨の骨折は、ウサギの拘束が不適切であったり、恐怖や防御のために突然蹴り出したりした場合に容易に起こりうる。

重い後肢を支えきれずに突き出してしまうと、動物の軽量の骨格に大きなストレスを与え、骨格や脊髄の損傷を引き起こす可能性がある。稀にウサギが滑りやすい場所を走ろうとした場合にも起こります。多くは、少し高い所から落下することで、起こりえます。

症状は、後肢の麻痺、皮膚感覚の喪失、肛門括約筋や膀胱の運動制御の喪失などが典型的な徴候です。最も多い骨折部位は、第 7 腰椎(L7)椎体またはその尾側の関節突起です。

診断は、臨床症状、神経学的検査、及び X 線撮影ですが、すべてはその麻痺の程度によります。部分的な麻痺であれば、歩行カートや理学療法を行うことが出来て、うさぎはある程度の生活を送ることができます。しかし、完全に麻痺している場合は、ウサギの場合この部分の手術が出来ないので、予後は難しく、麻痺が酷く、排便排尿が出来なければ、安楽死を選択せざるを得ない状況となります。

三鷹獣医科グループ・新座獣医科グループ 代表  
日本動物病院福祉協会認定の内科認定医  
特定非営利活動法人、小動物疾患研究所 理事長 小宮山典寛